

春 夏

～八十八の星座をなぞる～

第一章

目次

春の星座

うしかい座	六頁	コップ座	十三頁
うみへび座	六頁	しし座	十三頁
おおぐま座	七頁	てんびん座	十四頁
おとめ座	九頁	ポンプ座	十四頁
かに座	十頁	やまねこ座	十五頁
かみのけ座	十頁	りょうけん座	十五頁
からす座	十一頁	ろくぶんぎ座	十六頁
かんむり座	十一頁	春の大曲線	五頁
こぐま座	十二頁	春の大三角	五頁
こじし座	十二頁	春のダイヤモンド	五頁

夏の星座

いて座	二十頁	へびつかい座 (へび座)	二十五頁
いるか座	二十一頁	ヘルクレス座	二十六頁
こぎつね座	二十一頁	みなみのかんむり座	二十六頁
こと座	二十二頁	や座	二十七頁
さそり座	二十三頁	りゅう座	二十七頁
たて座	二十四頁	わし座	二十八頁
はくちょう座	二十四頁	夏の大三角	十九頁

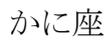
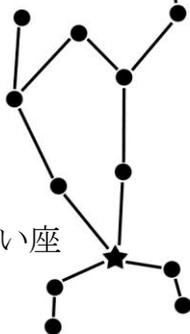
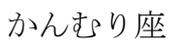
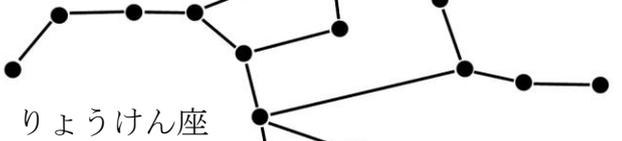
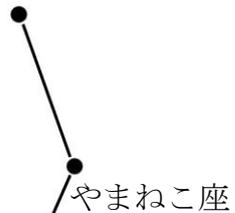
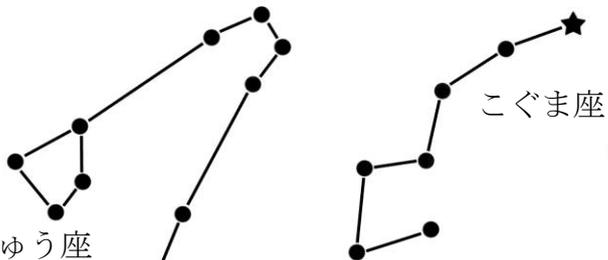
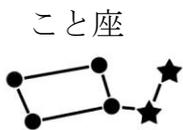
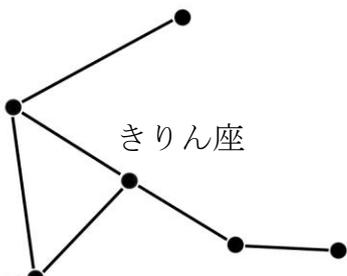
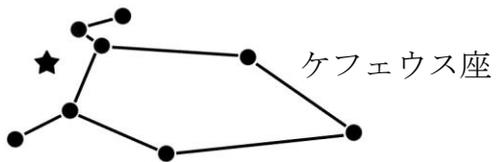
参考文献	二十九頁
------	------

前書き

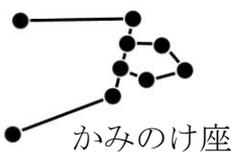
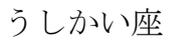
この冊子をお手に取っていただき、ありがとうございます。この冊子は三冊に渡って全天にある八十八の星座を紹介したものです。この冊子には星座と、それに属する星座や知識を載せています。ぜひ、堪能してください。また、星座は様々な結び方がありますが、その中でも私が選んだものを紹介しています。あらかじめご了承ください。

春

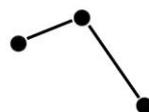
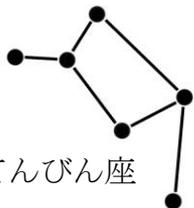
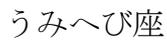
北



東



西



南



春の大曲線

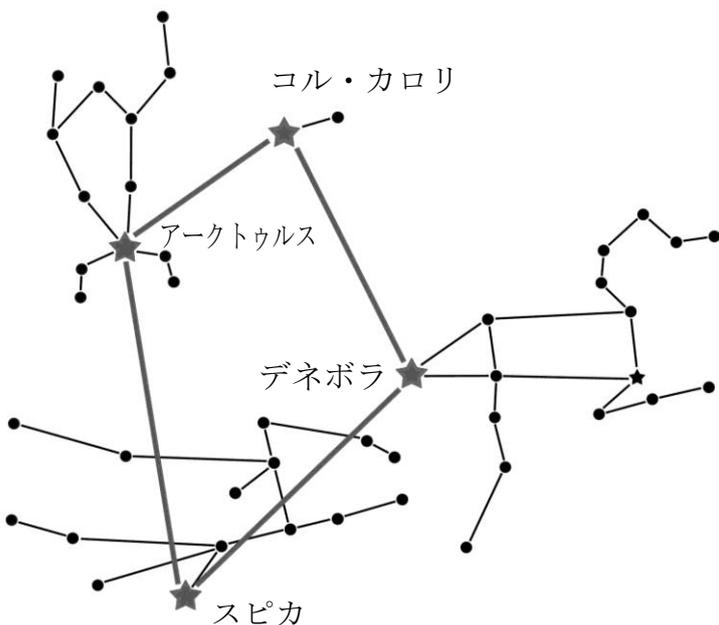
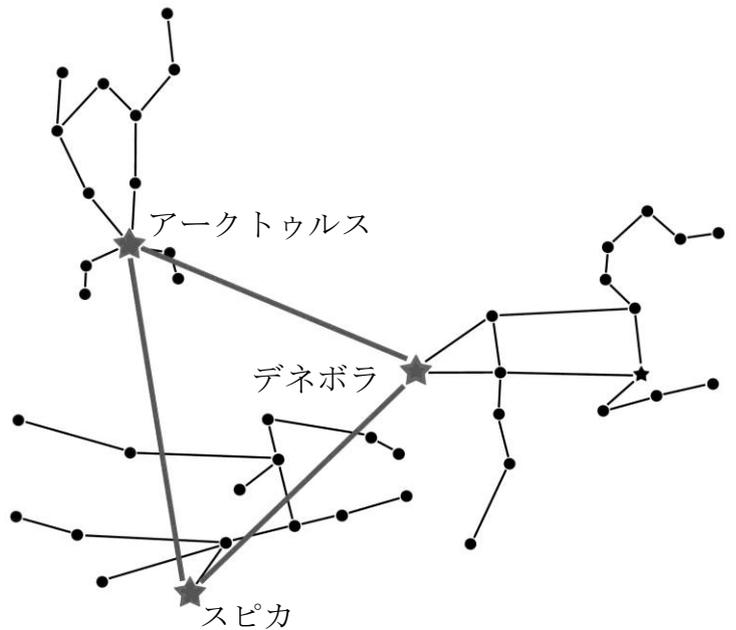
おおぐま座の北斗七星からうしかい座のアークトゥルス、おとめ座のスピカへと連なる曲線。

北から南へと伸びていく曲線は春の星座を見つける上での基準となるためぜひ心にとどめておいてほしい。

春の大三角

春の大曲線で結んだアークトゥルスとスピカ、それともう一つ、しし座のデネボラを結んだ三角形。

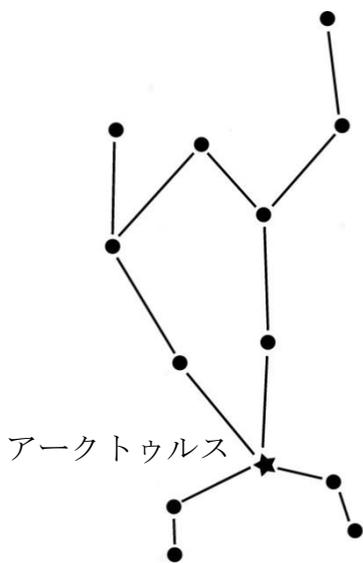
春の主要な一等星を結んでいるため非常に見つけやすい。



春のダイヤモンド

春の大三角にりょうけん座のコル・カロリを合わせて四辺形に結んだ並び。コル・カロリが少し観えにくいかもしれないが、春の夜空を眺める際はぜひ一度結んでみてほしい星の並びである。

うしかい座



『春の大曲線』『春の大三角』『春のダイヤモンド』を構成する一等星・アークトゥルスがあることで有名な星座。北斗七星からの曲線を伸ばした先にアークトゥルスがあるため、アークトゥルスから星座の位置を把握することが容易である。

星座絵に関しては諸説あり、名前の通り牛を飼う人を表しているとするものもあれば、天を支える神、アトラスを表しているという説、はたまたおおぐま座を追う牛飼いとする説もあり、定かではない。ギリシャ神話では諸説あるため、どれを信じるかは自分次第である。

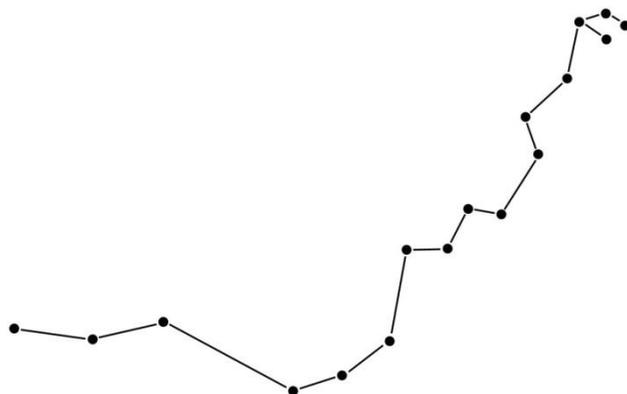
一等星・アークトゥルス

アークトゥルスは全天二十一の一等星の内の一つで赤色巨星。双眼鏡などで見ると綺麗な赤色をしている。また、おとめ座の一等星・スピカが美しい青色をしており、アークトゥルスと対照的な色をしているため、スピカと合わせて『春の夫婦星』とも言われている。ちなみにアークトゥルスが夫である。

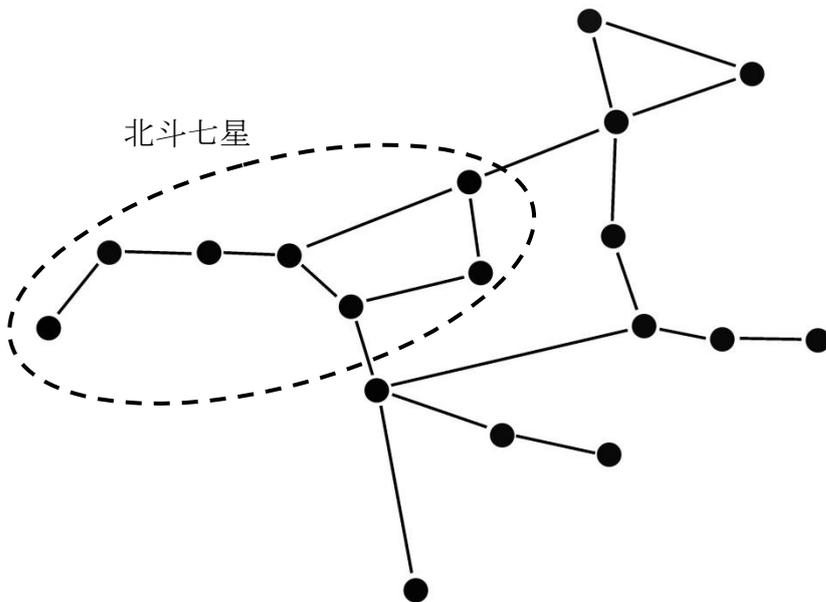
うみへび座

全天で最も領域が広い星座とされているが、二等星・アルファルド以外は暗い星が多いため結ぶことが難しい。さらに春の南の空に見えるため、場所によっては下半身が全く見えない。もし見る場合は町明かりが少なく、周りが開けた場所をオススメする。また、南天に所属する星座、みずへび座と対をなす星座と言われており、みずへび座が雄でうみへび座が雌である。

星座絵はギリシャ神話で勇者・ヘラクレスと戦ったヒュドラという怪物の姿であるとされている。ヒュドラは八本の首を持つ怪物であったが、勇者・ヘラクレスに倒される際は首が一本だけであったため、星座線は一本であると言われている。星座絵も一匹の大きな蛇の姿が描かれているだけで、八本の首を持っていたとされる生前の姿は確認することができない。



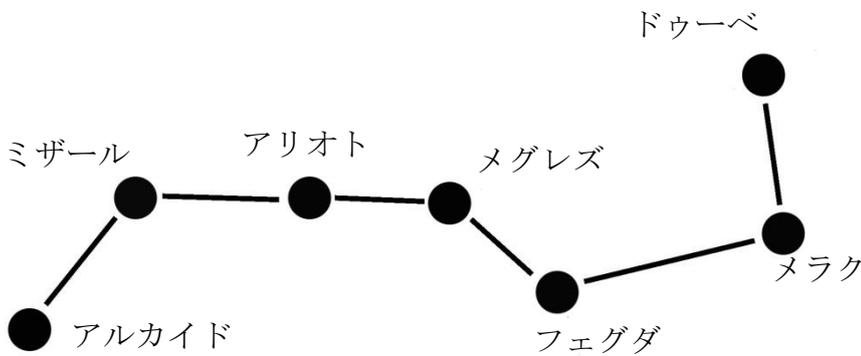
おおぐま座



有名な星の並びの一つ、北斗七星を有する星座であり、星座の領域も全天で三番目と、場所を把握することは非常に容易な春の星座の代表格。春以外の季節でも観ることができるため、夜に北の空を見上げれば北斗七星を観測することは可能である。しかし、おおぐま座全体となると、大変大きな星座であり、また北斗七星以外のおおぐま座を構成する星があまり明るくないため、結ぶことは少し難しい。

星座絵もその名の通り大きな熊の姿が描かれている。同じく春の星座、こぐま座とはギリシャ神話上で親子関係であるとされている。大神・ゼウスに見初められた森の妖精・カリストと、ゼウスとカリストの間に生まれた息子・アルカスがおおぐま座とこぐま座の元になったとされている。カリストはゼウスの子を産んだことで、ゼウスの正妻・ヘラの怒りを買って、大きな熊の姿に変えられてしまう。熊の姿では息子を育てられないとしたカリストは息子を他の妖精に託し、森へと姿を消した。数年が経ち、アルカスは狩人として成長し、銚で動物を狩っていた。そのときにカリストは成長した自分の息子の姿を見つけ、あまりの嬉しさに、自分が熊の姿であることも忘れて飛び出してしまう。アルカスは大きな熊が襲ってきたと勘違いし弓を放とうとする。この状況を天から見ていたゼウスが、二人を天にあげ、親を殺すということを防いだとされている。また、天に上げるときにアルカスの姿も熊にした。親の愛は不変なのである。

北斗七星



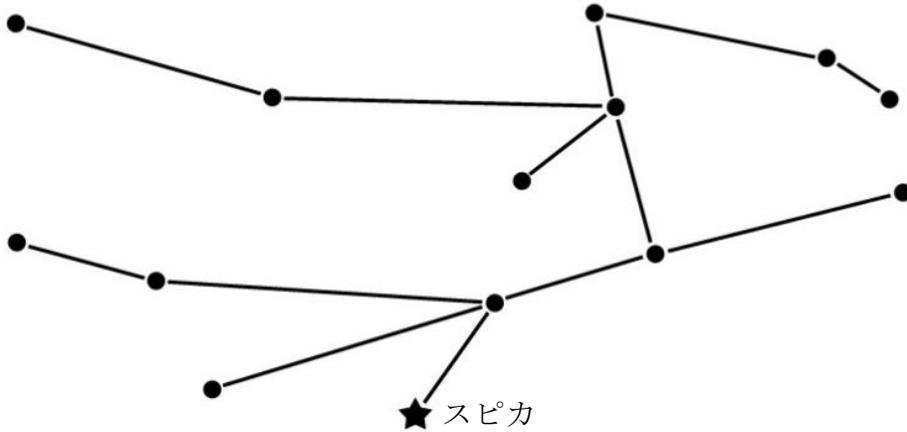
北斗七星は名前の通り「北」にあるひしゃく「斗」の形をした「七」つの「星」の並びのことである。また、北斗七星と対をなす星の並びとしてはいて座の南斗六星と呼ばれる並びがある。北斗七星に所属する星の名前は、ひし

ゃくの「コ」の字の先端から、ドゥーベ、メラク、フェグダ、メグレズ、アリオト、ミザール、アルカイドである。北斗七星は北を指す星である北極星を見つけるために用いられる。ドゥーベとメラクの二つの星の間隔を、メラクからドゥーベ側に五倍伸ばしたところに北極星がある、というものである。また、『春の大曲線』の始まり位置とされている北斗七星のアリオト、ミザール、アルカイドのうちのミザールは二重星であり、昔、兵士がミザールを二重星か見分けられるかどうかで視力の良さを測っていた。

おおぐま座運動星団

おおぐま座は、もとは一つの星団であったとされており、その星団の名前はおおぐま座運動星団という。その星団が長い年月を経て、今、私たちが見ている星座の形になったとされている。つまり、いずれはこのおおぐま座の形も、北斗七星の形も変わるということである。そして、このことはおおぐま座に限ったことではない。星雲や分子雲などから星が生まれ、重力によって星は動いている。今、私たちが見ているこの星空は、今この時しか見ることができないのである。そう考えると少し感慨深いものがある。

おとめ座



全天で二番目の領域を有する星座であり、黄道十二星座にも名を連ねている。『春の大曲線』『春の大三角』『春のダイヤモンド』を構成する一等星・スピカを見つければ大体の場所はわかるが、星座が広範囲、

スピカ以外の恒星の等級があまり高くないため、全てを結ぶことは少し難しい。

星座絵はギリシャ神話で登場する豊穡の女神・デーメーテルであるとされており、豊穡、実りの神を表しているため、右手には麦を持っている。

スピカ

全天二十一の一等星の一つ。『真珠星』とも呼ばれており、真珠のように美しく見ることができる。また、うしかい座の一等星・アークトゥルスが美しい赤色をしており、青色の星であるスピカと対照的な色をしているため、アークトゥルスと合わせて『春の夫婦星』とも呼ばれている。ちなみにスピカは妻である。また、スピカは青白い色をしているが、星の表面温度は高く、赤色巨星であるアークトゥルスより高い。

おとめ座銀河団

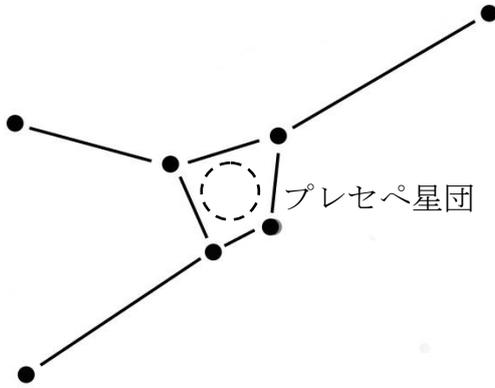
おとめ座には、おとめ座銀河団と呼ばれる局部銀河群が所属している。数多の星雲や星団、銀河があるため、望遠鏡などで観ると大変見応えのあるものとなっている。

かに座

冬から春への境目あたりに位置する黄道十二星座の一つ。構成する星は最も明るい星でさえ約四等星と大変暗く、結ぶのは難しいが、この星座の中心に位置するM4 4・プレセペ星団は散開星団として有名である。

星座絵はその名の通り蟹の形を表している。この蟹はうみへび座の元となった怪物・ヒュドラと勇者ヘラクレスの戦いの最中、ヒュドラの手助けをしようとしたものの、ヘラクレスに気づかれもせずに踏み殺されてしまった哀れな

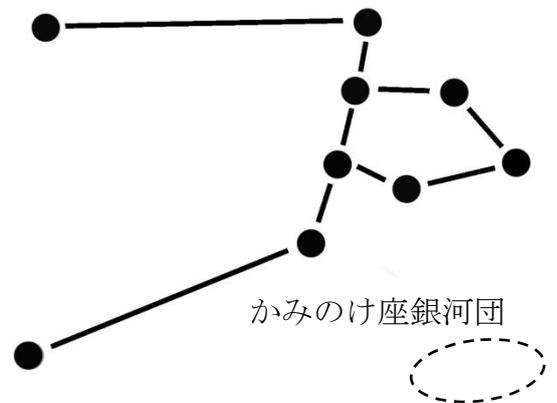
蟹である。しかし、その蟹の行動が称えられて星座としてかに座はできたのである。



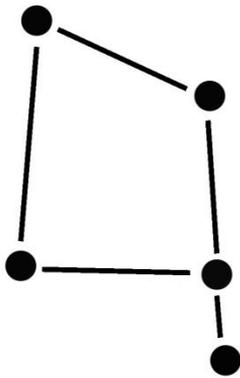
かみのけ座

『春のダイヤモンド』のちょうど中心に位置する星座。そのため、場所はだいたいわかるが、全体的に暗い星が多いため、星座線を結ぶことは難しい。また、かみのけ座の方角に、かみのけ座銀河団と呼ばれる銀河団があるが、銀河団の中では距離が離れている銀河団のため、観測することも難しい。

観測には難しい天体ではあるが、この星座の星座絵のモチーフとなった髪の毛には、戦場に向かった夫の無事を祈る妻の姿が描かれているという大変美しい物語が語り継がれている



からす座



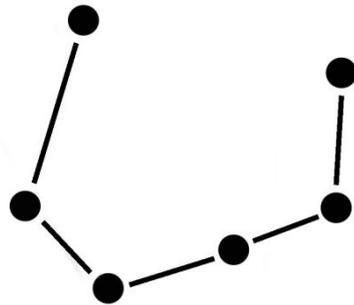
北斗七星からアークトゥルス、スピカへとつながる『春の大曲線』を延長したところにあるため、比較的に見つけやすい。『春の大曲線』をからす座まで、とする文献もあるが、からす座のどの星が『春の大曲線』を構成するのか、という点に関しては少し曖昧である。

星座絵では天にからすが打ち付けられており、その打ち付けるために用いた銀の釘の位置が星座点であるとされている。ギリシャ神話上では、打ち付けられた理由はなんと、自分の仕える王様に嘘をついたことが原因とされている。嘘はつくものではない、という少し教訓じみた神話である。

かんむり座

うしかい座から観て、おおぐま座とは反対側にある星座。目立った星はないが、きれいな半円形を描いているため、結ぶことは容易である。

星座絵はその名の通り冠が描かれている。ギリシャ神話でこの冠は、男女が離れ離れになってしまい、悲しんだ女性を元気づけるために酒神・デュオニューソスはその女性を妃に迎えたときに作った冠で、その冠がこの星座になったとされている。

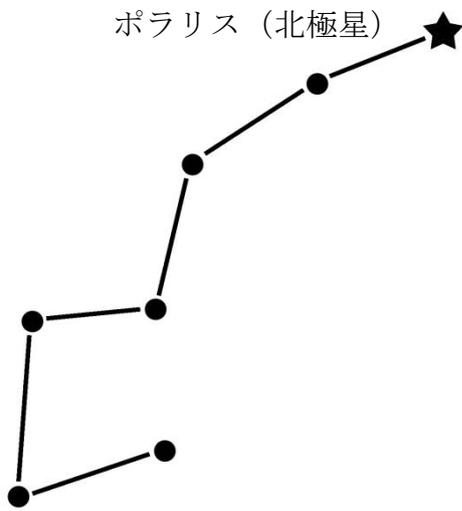


ヘルクレス座・かんむり座グレートウォール

二〇〇三年にヘルクレス座・かんむり座グレートウォールと呼ばれる銀河フィラメントが発見された。なんと、この天体は長さ百億光年と現在知られている中で最大の宇宙の大規模構造である。銀河フィラメントとは、銀河群、銀河団が多数集まったものである。

宇宙にはまだまだ発見されていない天体がたくさんあるのである。

こぐま座



星を観る上で、方角を確認するときに使う星・北極星を有する星座。私たちのいる北半球なら一年中その姿を観測することができるため、知名度も高い。

星座絵はその名の通り小熊の姿を描いている。こぐま座のギリシャ神話は「おおぐま座」の神話と同じである。熊にしては尻尾が長い理由もここにあり、その内容は美しい親子愛の物語である。

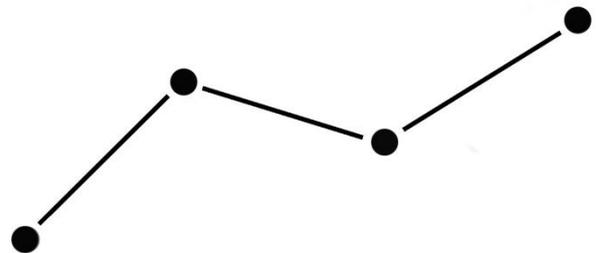
二等星・ポラリス

地球の地軸の延長線上に存在する星で、一年を通して北を指す方向からほとんど動かないため、北の方角を知る上で大変役に立つ星。星の名前はポラリスであるが、北極星という名前の方が印象強い。また、星は何万年という時を経て移動する。そのため、今はポラリスが北極星であるが、数万年前はりゅう座の四等星・ドゥバンが北極星であった。さらにこれから一三〇〇万年後にはこと座の一等星ベガが北極星になると言われている。また、あまり知られていないが、ポラリスは三つの星が重なっている三重星である。

こじし座

おおぐま座としし座の間隙間を埋めるために作られた星座。そのため明るい星も少なく、最も明るくて約四等星と肉眼での観測は厳しい。またこの星座が作られたのも他と比べて遅いため、神話もない。

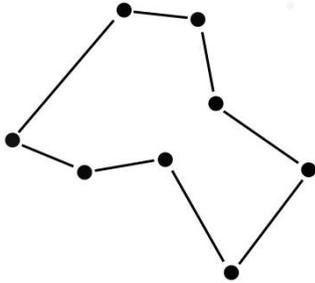
星座絵は名前の通り小さな獅子の姿が描かれている。その姿からしし座の子であるとする説もある。



コップ座

明るい星がない星座であり、春の夜空の南側に位置し、からす座の少し西側に位置している。

コップ座のコップに関して、ギリシャ神話では諸説あり、台所にあるようなものではなく大きな杯を表しているとされ、その杯は魔女が薬を作る際に使われた鍋を表しているとされていたり、酒の神ディオニュソスの所持品であるとされていたりしている。誰の所持品かという明確な説はない。



しし座

『春の大三角』『春のダイヤモンド』を構成する星、デネボラが所属しており、春の夜空の天頂にあるため見つけやすい黄道十二星座の一つ。また『ししの大鎌』と呼ばれる個所も大変見つけやすい。春に観測する際は是非観ることをオススメする。

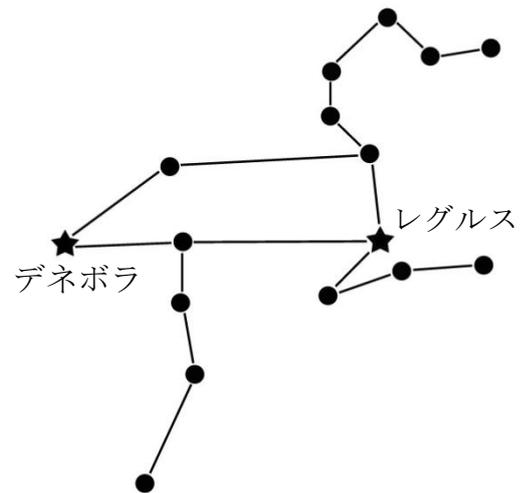
星座絵は獅子の姿を現しており、この獅子はギリシャ神話で勇者・ヘラクレスと戦った鋼鉄の皮膚を持つ人食い獅子を表しているとされている。

一等星・レグルス

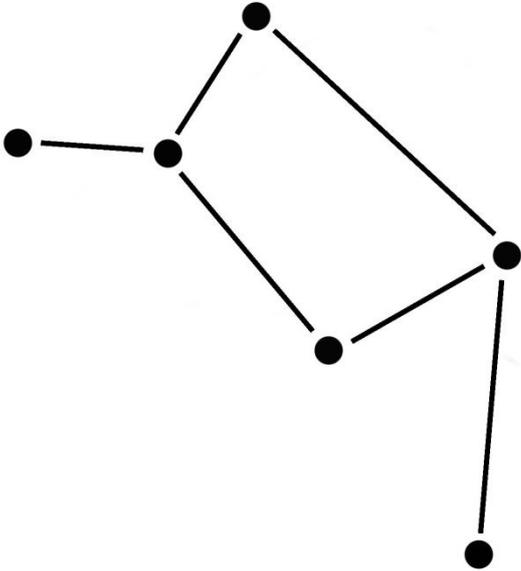
全天二十一の一等星の一つであるレグルスは『獅子の心臓』という意味を持っており、その名の通り星座絵の獅子の心臓部に位置している。また、レグルスから獅子の頭へと連なる「？」マークを逆にしたような星の並び『獅子の大鎌』が大変特徴的であり、星座を見つけるのに役立っている。

二等星・デネボラ

デネボラは『獅子の尾』という意味を持っており、その名の通り獅子の尾の部分に位置している。『春の大三角』『春のダイヤモンド』を構成する星の一つで、天頂で大変目立つため、比較的に見つけやすい。



てんびん座



春の南の夜空に位置する星座。さそり座の西に位置し、元はさそり座の一部とされていたが独立した。元がさそり座である名残として、てんびん座に存在する二つの二等星の名前は北の爪と南の爪を意味している。また、黄道十二星座の中では最も新しくできた星座であるとされている。

この天秤は正義と天文の女神・アストライアーの所有物で物事の善悪を判断するために使われていたものが天に上げられたとされている。また、このてんびん座とおとめ座が近くに存在するため、おとめ座をアストライアーとする説もある。そして、星座絵は私たちが理科の実験などで目にしたことがあるであ

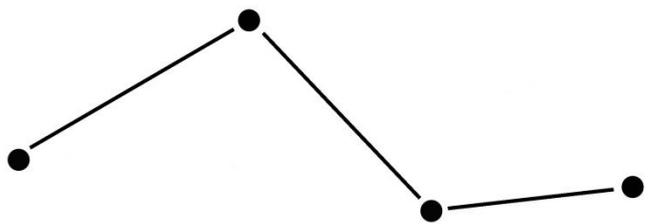
ろう両皿式天秤が描かれている。ギリシャ神話ではこの両皿を使って人の善悪を測ったと言われている。

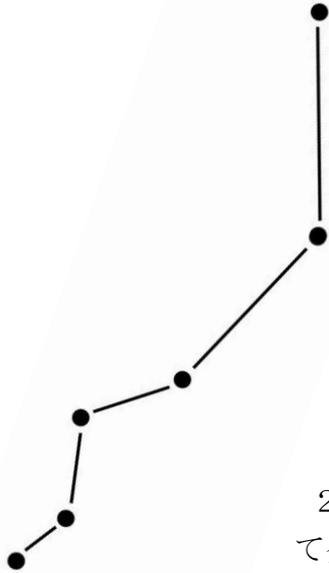
ポンプ座

南の夜空に存在するため南天の星座に区分される場合もある星座。全体的に暗い星が多いため、結ぶのは難しい。星座としては南天の星座が多く制定された一七〇〇年代にできたため、神話はない。

星座絵は水を汲みとる方のポンプではなく、真空ポンプの方である。

そのため日本ではポンプ座と呼ばずに排気器座と呼ばれていたこともある。





やまねこ座

おおぐま座の西側に位置している南北に伸びた星座。名前の由来はこの星座を制定したヨハネス・ヘヴェリウスが「この星座を見るにはヤマネコのような鋭い目が必要だ。」と述べていたからである。

超新星 2014 a i

二〇一四年三月二十三日にやまねこ座のNGC 2832の方角に発見された超新星。このようにごく最近になって発見される天体もあるため、人々の星空への探求は尽きないのであろう。

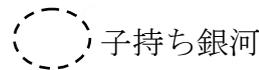


NGC 2832

りょうけん座

星座点が二個であるため直線で描かれている星座。北斗七星の南に位置しており、場所を見つけることは容易だが、明るさで少し劣ってしまうので見つけるのは少し難しい。また『春のダイヤモンド』を構成する星の一つである、コル・カロリを有する星座である。

星座絵は猟犬の姿が描かれており、二つの星がそれぞれの犬の頭を表している。



子持ち銀河



コル・カロリ

二等星・コル・カロリ

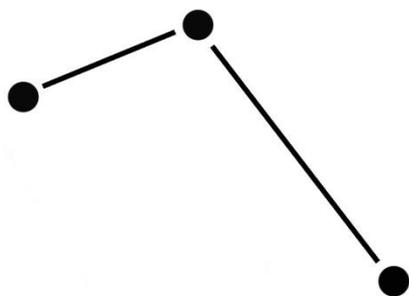
コル・カロリは「チャールズの心臓」という意味を持っている。チャールズというのは一六〇〇年代にイングランド、スコットランド、アイルランドの王であったチャールズ二世のことである。このように、星の名前や星座、その他の天体に人名が付けられることはよくあることである。

子持ち銀河

北斗七星とりょうけん座のちょうど間くらいに存在する。小さな銀河と大きな銀河が並んでおり、大きな銀河の重力によって、小さな銀河に所属する天体が吸い取られている様子を見ることができる。この銀河は有名で、壮大であるため目にした方も多と思う。まだ見たことがない、という方は一度見てみる

ことをお勧めする。

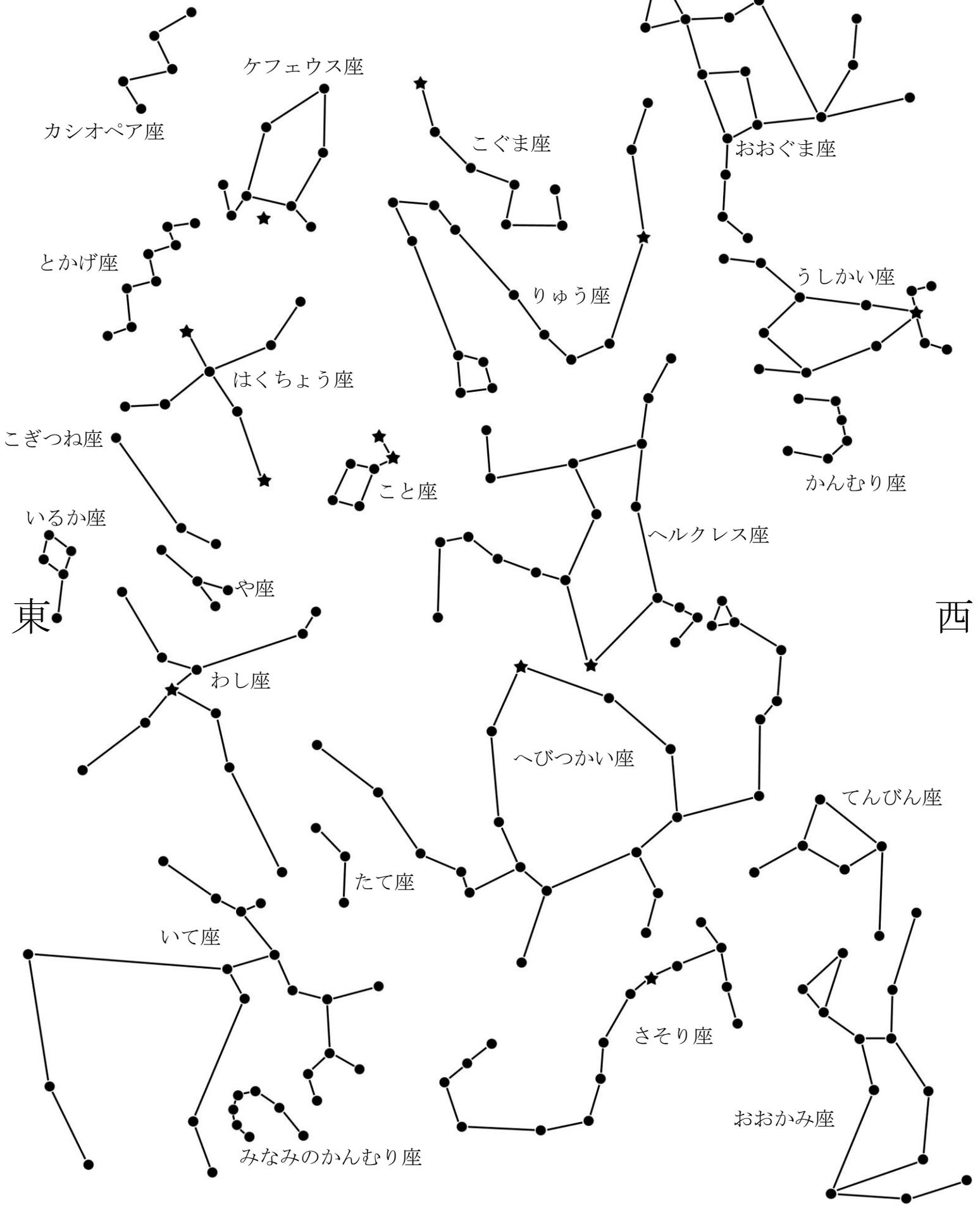
ろくぶんぎ座



最も明るい星が四等星と、大変暗い星座であるため見つけるのが難しい星座。六分儀とは天体や物標の高度、水平方向の角度を測るものである。この星座を制定した天文学者のヨハネス・ヘヴェリウスは肉眼での天体観測を好んでいたため、六分儀が必須であった。その思いを表してか、星座にしたのであろう。昔も今も、星を愛する気持ちは変わらず残っているのである。

夏

北



東

西

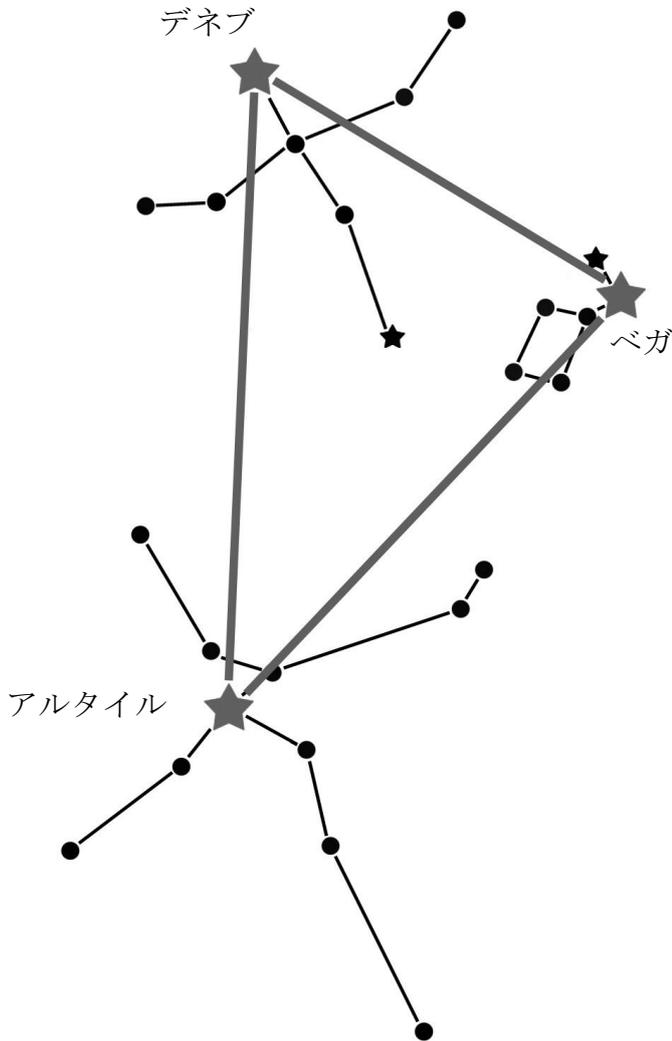
南

夏の大三角

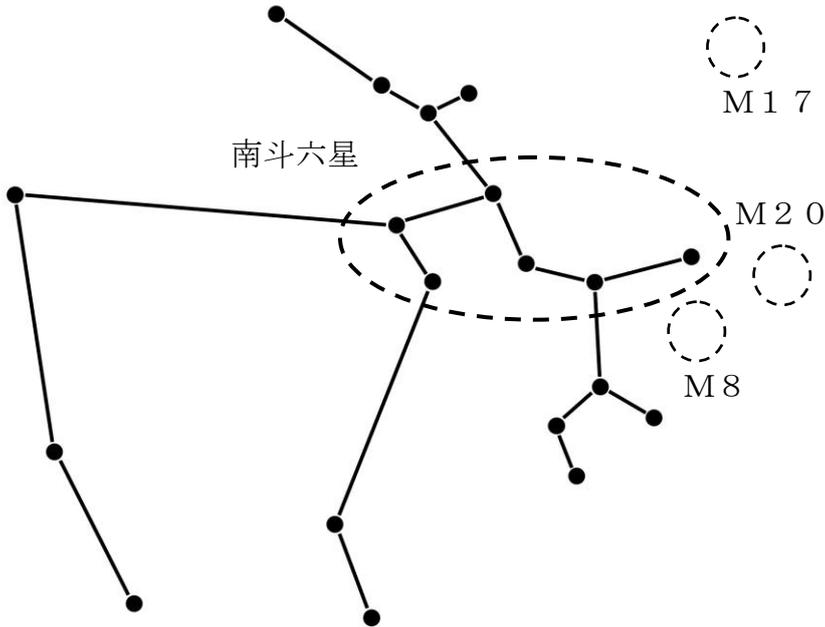
夏の夜空の代表格ともいえる星の並び。はくちょう座のデネブ、こと座のベガ、わし座のアルタイルと一等星を結んでいるため見つけやすい星の並びでもある。

はくちょう座のデネブからアルビレオまでの線がちょうど天の川の中に位置しており、そのまま伸ばしていくとさそり座のアンタレスに向いているため、夏の星座を把握するのにも非常に役に立つ。

街中の街灯のある場所でもその姿を観ることができるため、星を身近に感じることができる。また、街灯のない場所では『夏の大三角』を横切るように天の川が流れているため、大変美しい。ぜひとも一度は観てほしい星の並びである。



いて座



夏の南の空に位置する黄道十二星座。『南斗六星』が見つけやすいためそこから結びやすいが、地平線ギリギリに現れることが多いため、全体を観るなら周りの開けた場所で観測することをお勧めする。また、いて座は全天八十八星座の中で最も多くメシエ天体が所属しており、その数は十五個。大変見応えのあるものとなっている。

星座絵は上半身が人間、下半身が馬のケンタウルスというギリシャ神話上の幻獣

を表している。このいて座の元となったのはケンタウルスの中でも有名なケイロンというケンタウルスで、弓の名手であったため、弓をつがえた姿が描かれている。

M8・干潟星雲

いて座にある十五のメシエ天体の内の一つ。散光星雲と暗黒星雲の混ざった星雲であり、その姿が干潟に似ていることからこの名前が付けられた。散開星団も重なって存在するという大変珍しく、そして美しい星雲である。ちなみに干潟とは、海岸などにある砂や泥によってできた低湿地帯のこと。河口付近によく見られる。

M20・三裂星雲

いて座にある十五のメシエ天体の内の一つ。散光星雲と地球の間に暗黒星雲があるため、三つに区切られているように見える星雲。しかし、近年、望遠鏡の精度が上がり、星間ガスが三つではなく四つに分かれていることが判明し、名前と実際の姿が異なるものとなってしまった。その後、四つに分けられていることからこの星雲を「クローバー」と呼ぶ地域も現れた。

M17・オメガ星雲

いて座にある十五のメシエ天体の内の一つ。散光星雲であり、星雲の内側の星間ガスにループ状の構造が見られ、ギリシャ文字の「Ω」のように見えることから、この名がつけられたと言われている。

南斗六星

南斗六星は、おおぐま座にある北斗七星と対をなす星の並びと言われている。その並びは北斗七星同様、ひしゃく、スプーンのような形をしており、その姿と位置が「天の川 (Milky Way)」を掬うような形であることから別名「ミルクディッパー (ミルク匙)」とも呼ばれている。

いるか座

『夏の大三角』の東側にある少し小さな星座。あまり明るい星はないが「天の川」が肉眼でわかるほど、辺りが暗ければ観ることができる。

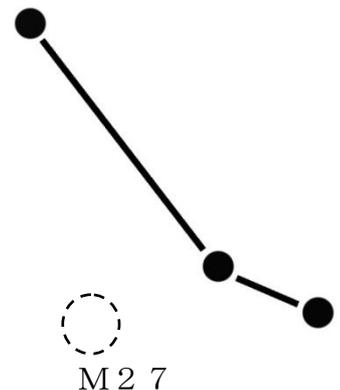
いるかと聞いて、海にいる愛らしい生き物を想像するかもしれないが、いるか座の星座絵はそれとは全く似ても似つかない姿をしている。私たちがよく知る生き物として例をあげるならば、タツノオトシゴに近い姿をしている。しかし、その『夏の大三角』にそっと寄り添うように夜空にいる姿は愛くるしいものである。



こぎつね座

『夏の大三角』の「はくちょう座」と「わし座」の間にある星座。明るい星が少ないことや一等星のデネブ、アルタイルがすぐ近くにあることから見つけるのは少し難しい星座である。

星座絵は、現在は「小さな狐」が描かれているが、元は「ガチョウを啜った狐」であったとされており、後にガチョウと狐が分離。そののちにガチョウを模した星座はなくなってしまった。星座の成り立ちなどは複雑な物が多く面白いが、このように星座ができてからの変遷も面白いものである。

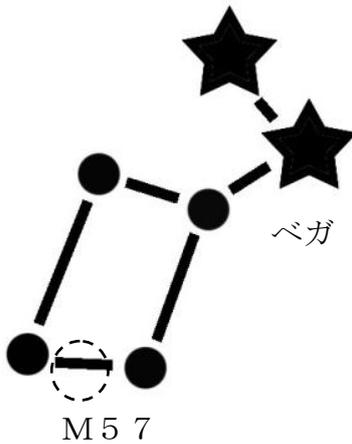


亜鈴状星雲

こぎつね座とや座のちょうど間に位置する惑星状星雲。星座は有名ではないが、亜鈴状星雲は巨大な惑星状星雲として有名である。市販の双眼鏡でもその姿を確認することができるが、その名前の由来となった鉄アレイのような形を観測するためには望遠鏡が必要である。

こと座

ダブル・ダブル・スター



『夏の大三角』を構成するベガが存在する星座。『夏の大三角』の中では最も小さいが、ベガが大変見つけやすいため、星座線を結ぶことは容易である。全天二十一の一等星うちの一つ、ベガは七夕で言うところの「織姫星」である。そしてこのベガは一三〇〇万年後に北極星になると言われている。

星座絵は名前の通り楽器の「こと」を表しているが、和楽器の「琴」ではなく、どちらかと言えば「ハープ」に近いものである。こと座のギリシャ神話は少し物悲しい話として受け継がれている。

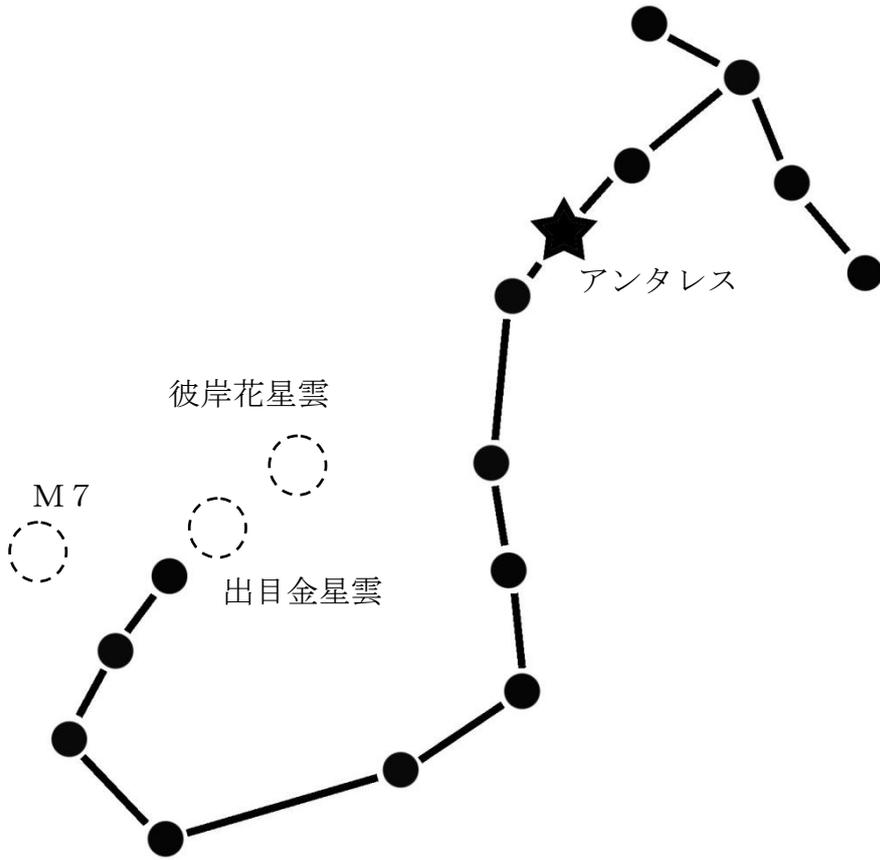
ダブル・ダブル・スター

ダブル・ダブル・スターというのは二重星が二つ重なっていることを称して名づけられたものである。二重星というのは二つの星がちょうど重なって見える状態のものを指す。そしてその二つの二重星が重なっているように見えるため、このように呼ばれているのである。

M 5 7 ・ 環状星雲

環状星雲は別名リング星雲とも呼ばれるほど円形に広がった惑星状星雲であり、その円形がいろいろな色で何層も重なっているため、大変きれいな星雲である。色がなぜわかれているかという点、それぞれの星間ガスを構成する分子がこの星雲の中心部にある白色惑星からの紫外線を受けており、それによって光が屈折し、いろいろな色に見えるのである。

さそり座



夏の南の夜空に位置する星座。「はくちょう座」の尾である一等星・デネブからくちばしにあたる二重星・アルビレオにかけての星座線を延長していくと見つけることができるが、周りが開けている場所でない、さそり座の全体図を把握することはできない。しかし出目金星雲や彼岸花星雲などの星雲やM7、通称・トレミー星団などを観ることもできるため、オススメである。

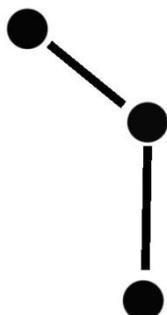
星座絵はその名の通り、蠍をかたどっている。この蠍は、オリオンという狩人を殺して天に上げられたとされている。人を殺して天に上げられるとはなんとも不思議な

話だが、隣にあるいて座の弓の先がさそり座であることから、常に命を狙われる形となっている。人を殺していいわけではないのである。

一等星・アンタレス

全天二十一の一等星・アンタレスは「アンチ・アーレス」という言葉が元であり、「アンチ」は「対抗する」、「アーレス」は火星のことを指し、訳すると「火星に対抗するもの」という意味がある。火星が夜空に現れる位置とアンタレスが近く、互いに明るさを競っているように見えたため、このような名前が付けられたのである。

たて座

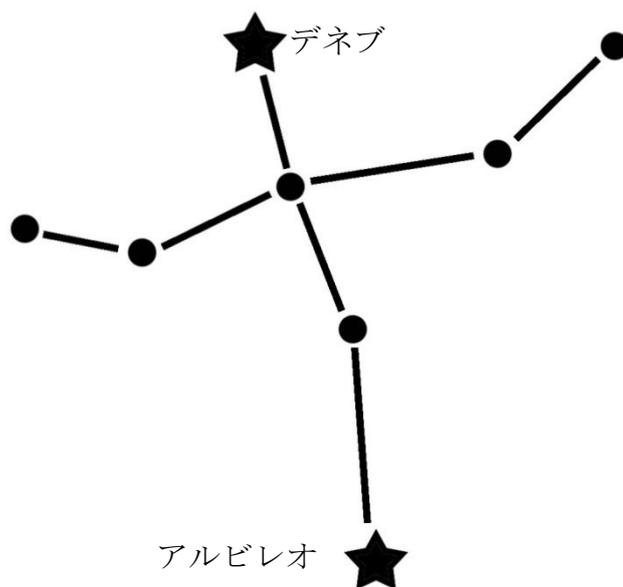


わし座の南にある星座。しかし大変暗く、近くにアルタイルという一等星が存在するため、なかなか観測しづらい。このたて座のたては、一六七九年に焼失したヴェリウス観測所の再建に協力したポーランド王ヤン三世ソビエスキを記念して建てられたものである。このように観測者が適当に名前を付けるのではなく、人をたたえて付けられる星座もある。

はくちょう座

『夏の大三角』の一つであるデネブを有する星座。『夏の大三角』でもっとも北に位置し、天の川上に星座があるため、見つけるのは容易である。またはくちょう座は別名ノーザンクロス（北十字）とも呼ばれており、南天の星座であるみなみじゅうじ座、別名サザンクロスと対をなす星座と言われている。星座絵は翼を広げた雄大なはくちょうの姿が描かれている。

このはくちょう座の星座絵のモデルとなったのはギリシャ神話上の大神・ゼウスであり、大神・ゼウスが人間の王妃・レダをかどわかすために変身した姿とされている。



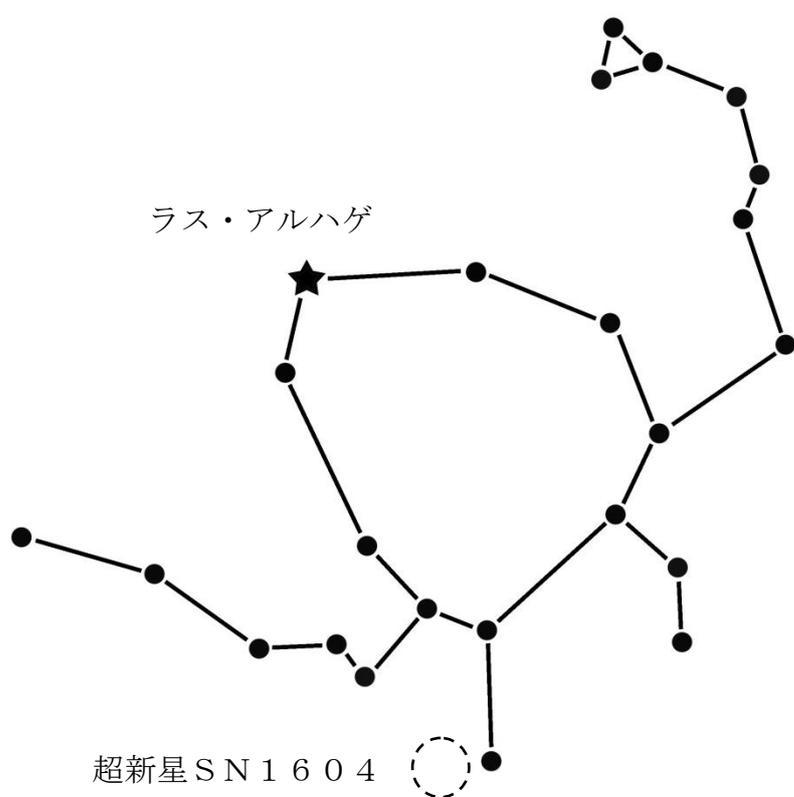
一等星・デネブ

全天二十一の一等星の一つであるデネブは別名「はくちょうの尾」と言われており、その名の通り、星座絵でははくちょうの尾の部分に位置する。また、ちょうど天の川上に星があることから「天の架け橋」とも言われている。

二重星・アルビレオ

アルビレオは白鳥のくちばしに位置する。アルビレオは最も色が対照的な二重星として有名である。そのためアルビレオは「北天の宝石」と呼ばれている。

へびつかい座（へび座）



へび座とへびつかい座は別々で数えられることもあるが、多くの場合はこの二つを合わせてへびつかい座としている。へび座とへびつかい座を足した星座の領域の広さは、うみへび座を超えるとも言われている。星座はこと座の西に位置するわかりやすい場所ではあるが、ラス・アルハゲ以外の星があまり明るくないため、結ぶのは少し難しい。

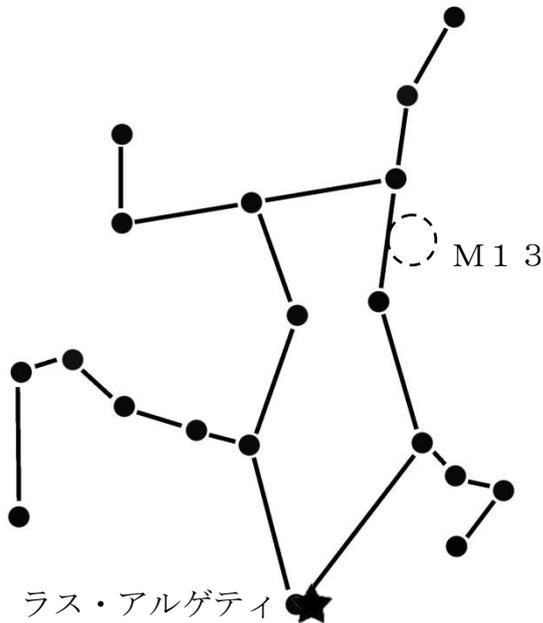
星座絵はその名の通り蛇を掴んだ人が描かれており、この人物はアスクレピオスというギリシャ神話上の医者である。アスクレピオスは医者として大変有能で、なんと死者を蘇生させることを可能にしてしまった。そのため冥

界の王・ハデス、大神・ゼウスの怒りを買って天罰を与えられてしまった。その後、アスクレピオスは医者としての功績を称えられ、天に上げられたと言われている。

超新星SN1604

一六〇四年にへびつかい座付近で超新星SN1604が発見され、一時期話題となった。この星を発見したヨハネス・ケプラーの名前にあやかり「ケプラーの星」とも呼ばれている。

ヘルクレス座



こと座のすぐ西側にある全天で五番目に大きい星座。大きいからと言って見つけやすいわけではなく、明るい星が少なく全体像を結ぶのは難しい。

星座絵は男の姿が描かれており、ギリシャ神話では勇者・ヘラクレスとして名を馳せている。ヘラクレスは十二の難業と言われる試練を超えたことで有名である。また多くの神話と関わっており、しし座、かに座、うみへび座、りゅう座の神話にはヘラクレスが関わっている。

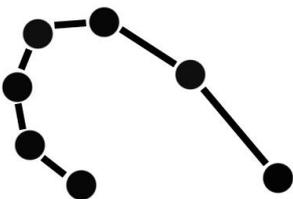
二重星・ラス・アルゲティ

ラス・アルゲティはちょうど星座絵で言うとヘルクレス座の頭に位置し、へびつかい座のラス・アルハゲという二等星の近くに存在する。ラス・アルゲティの二重星のうち、主星は脈動変光星である。脈動変光星とは星が膨張と収縮を繰り返し、星の形が変わることによって明るさが変わる変光星のことである。

M13

全天で最も美しいとされている球状星団。晴れている空気の澄んだ地域なら肉眼で見えることも可能である。

みなみのかんむり座



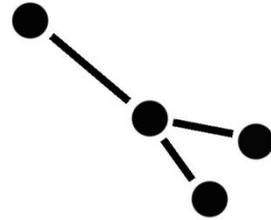
いて座のすぐそばにあるが、南の空の大変低い位置に存在するため日本で観測するのはなかなか難しい。また明るい星が少ないため見える場所に行ったとしても結ぶことは難しい。

みなみのかんむり座であらわされる冠は、かんむり座の冠とは全くの別物で、一説によればいて座のもととなったケンタウルス族のケイロンが被っていたかんむりであるとされている。

や座

はくちょう座とわし座の間にある星座だが、あまり明るい星がなく、小さいため、見つけることは少し難しい。しかし晴れた日のきれいな夜空なら観ることが可能である。

ギリシャ神話上ではこの矢の所有者に複数の説があり、愛の神・エロスの所有物であるとする説と、狩人オリオンの所有物であるとする説があるが、前者の方が有名である。愛の神・エロスの所有物であるという説から、恋のキューピッドは弓矢で男女の心を射止めるという俗説も生まれたとされる。神話から派生したものや考えが現在もあるということは決して珍しいことではない。



りゅう座

こぐま座とおおぐま座の間にS字で割り込むように存在する星座。明るい星があまりないが明るくきれいな夜空なら結ぶことは可能である。

星座絵はその名の通り竜の姿が描かれている。この竜はギリシャ神話では、勇者・ヘラクレスの十二の難業の十一つ目の難業で出てくる百の頭を持つ竜・ラドンであるとされている。百の頭を持つ竜がもとではあるが、星座絵では頭は一つである。また胴体が何度も円を描いているが星座線は至って普通の曲線である。

NGC 6543・キャッツアイ

星雲

キャッツアイ星雲はりゅう座の頭から見て、一つ目の曲がる部分に囲われるように位置している惑星状星雲。見た目が名前の通り猫の目のように見えることから、この名前が付けられた。



ように見えることから、この名前が付けられた。

四等星・ドウバン

ドウバンは元北極星として有名である。地球の地軸が傾いているため、何万年かの周期で北を指す北極星は変わるのである。つまり、今の北極星であるこぐま座のポラリスも元北極星になる日が来るのである。もちろん北極星だけではなく、今見ている星が未来永劫同じ場所に居続けることはない。今、この時間にある星空はもう二度と訪れることがないのである、そう考えると星というものも、星座というものもかけがえのないものであると思えるのではないだろうか。

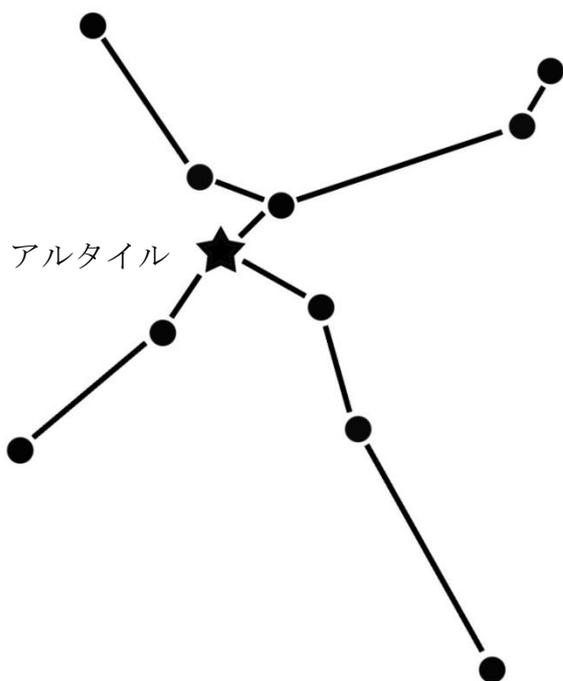
わし座

『夏の大三角』を構成する一等星、アルタイルを含む星座。天の川の近くにあり、明るい星も多いため比較的に見つけやすい。

星座絵は羽を広げた大きな鷲の姿をしている。この鷲はギリシャ神話上では大神・ゼウスにつかえている鷲である。この鷲はみずがめ座の元となった美少年・ガニメデスをゼウスの命で誘拐した鷲である。誘拐という現代の日本なら犯罪にあたる行為を行ったのに星座になるとは、なんとも不思議な話である。

一等星・アルタイル

全天二十一の一等星の一つであるアルタイルは七夕では「彦星」として存在する。『夏の大三角』で見ると、織姫星（ベガ）に近い位置に存在しているように見えるが、実際は十五光年も離れている。



参考文献

- 『星空の神々 全天88星座の神話・伝承』長島昌裕 著 親紀元社 一九九九年
- 『春・夏・秋・冬・南天 星座・星雲・星団ガイドブック』八板康磨 著 新星出版社 二〇〇〇年
- 『春の星座博物館』山田卓 著 地人書館 二〇〇〇年
- 『夏の星座博物館』山田卓 著 地人書館 二〇〇〇年
- 『星座の事典』沼澤茂美／脇屋奈々代 著 ナツメ社 二〇〇七年
- 『星座の見かたがわかる本』藤井旭 著 誠文堂新光社 二〇〇七年
- 『星の伝説がわかる本』藤井旭 著 誠文堂新光社 二〇〇八年
- 『改定新版 全天星座百科』藤井旭 著 河出書房新社 二〇一三年

後書き

いかがでしたでしょうか？春は『春の大曲線』から『春の大三角』『春のダイヤモンド』と目を移しつつ、多くの星座を楽しむことができ、夏は『夏の大三角』や、そのほかの一等星も多く、星座を簡単に見つけることができ、非常に楽しむのに適しています。暖かくなる季節であるため、長時間の観測も楽しめます。観測のときにこの冊子が皆さんの観測をよりよいものにしてければ、本望です。

制作者 Nakamura

発行 天文サークル 星宿

<http://hoshiyado.com/>